

こぼれ話 一番大変なのは鳥居の建替え

「今回、最も時間を要しているのが第一鳥居の建替で、残念ながら鎮座百年大祭には間に合いませんでした」と高山氏。平成28年に完成した南玉垣鳥居（第三鳥居）も約6年掛ったとか。「鳥居に使う材は、周りの白太を削り赤身のみを使います。そのため見た目の1.3倍近くのサイズが必要」だから腐りづらく長持ちもする。創建時に建てられた第二鳥居は、高さ12m、幅17.1mもあり、国産でこのサイズは見つからず台湾から取り寄せたと文献に残っている。

「やっと用材を調達でき、いま乾燥させている最中です。建方完了までを計算するとスタートから約8年掛かりとなるでしょう」と話す。地中に埋められている部分を銅板で覆い腐食を防止しているなどは聞き知っていたが、鳥居の建替えがそこまで大変だとは。完成した際は、より丁寧に頭を下げてくぐりたい。



葺替えたばかりの箇所(右)に比べ、6か月前に作業を終えた銅板(左)は、すでに酸化皮膜が発生。味わいある落ち着いた風合いに変化している。



▲経験の少ない若き職人もベテランに混じり、銅屋根葺きの技術を吸収し腕を高めていった。

創建時の鬼は、まさに匠の技が詰まった名作。その技術を伝えるためにもそのまま活かすことに。



本殿屋根などの銅屋根は一字葺きである。熱による伸縮を綿密に計算し、雨漏り対策はもちろん美しい屋根の曲面も見事に再現した。



先人の技を活かし、次代へと継承  
約13万枚の銅板で屋根を葺替える

明治神宮 鎮座百年祭記念事業

明治神宮では、鎮座百年祭記念事業の一環として各神門と廻廊、外拝殿、内拝殿、本殿などの銅屋根が葺替えられた。その施工屋根面積は9,979㎡。使用された四ツ切銅板はなんと約13万枚、その他役物を含めると銅板総使用量は約70トンにもなる。



明治神宮は東京都渋谷区にある面積70万㎡を超える壮大な人工の杜。全国から献木された約10万本を植栽し、百年、二百年先の完成を想定し設計されたと言われる。木々は、100年の時の流れとともに豊かな森に成長し、国民の心のふるさと、憩いの場にもなっている。

未来へ息づく「永遠の杜」と共に  
銅屋根の美と匠の技も受け継ぐ

明治神宮は、先の戦争で建物の半分以上が空襲に見舞われ、昭和33年に当時の神社建築の粋を集めて復興造営がなされている。「御鎮座百年と言っても明治神宮は、歴史的建造物としてはまだ若く新しい建物です。それでも文化財としての価値は非常に高く、今回の修繕でも可能な限り創建時の形状や技法をそのまま残せるように修復していくことが我々の使命です。そこで着工する1年ほど前から当時の文献などを調べていきました」と清水建設株式会社工事長の高山和弘氏と社寺文化財担当の小橋孝吉氏。しかし空襲の影響なのか、創建時の詳しい資料はほとんど残っていないと言った。「創建時は、大正時代の社寺設計のトップ、伊東忠太氏が設計を手掛けているのですが、銅屋根はもちろん本殿などの詳細図面を見つづけることはできませんでした」

参考になるのは、全体の見取り図程度。内拝殿や本殿は一般人は入ることもできないため、見積りや工程計画の作成が困難な状態だった。「神事を滞らせず、いかにスムーズに工事を進めていくかも大事なポイントです。そこで事前に本殿なども調査させていただき全容を把握。



清水建設株式会社 社寺文化財担当 小橋 孝吉氏



清水建設株式会社 工事長 高山 和弘氏

【明治神宮 御社殿群修復工事の概要】

- 工事内容…屋根銅板葺替え、屋根木下地修理、鋳金具修繕、木部清掃・洗い、垂木ほか小口塗装、電気設備更新、避雷針設備更新、防災設備更新、北玉垣鳥居建替、御飯殿新築・解体(移築予定)
- 敷地面積…738,760㎡
- 社殿延床面積…2,091㎡(633坪)
- 施工屋根面積…9,979㎡
- 使用銅板…屋根葺板(四ツ切銅板)約13万枚。銅板総使用量約70トン
- 工期…第一期 平成28年3月1日～ 第四期 令和元年12月20日(46ヵ月)

2020年の鎮座百年大祭へ  
御社殿群修復工事を無事に完了

2020年、明治神宮は大正9年に明治天皇と皇后の昭憲皇太后をお祀りする神社として、鎮座してから百年を迎える。この鎮座百年祭記念事業の目玉として、御社殿群修復工事・銅屋根の葺替えが行われた。担当したのは、神社仏閣建設のエキスパートとして、これまで明治神宮内の修復作業に携わってきた実績のある清水建設株式会社である。7月には予定通りに本殿修復工事が竣工。御祭神の御霊代が仮殿から本殿にお遷りになる本殿遷座祭「遷御の儀」も滞りなく執り行われた。

我々が敷地内の工事事務所を訪ねたのは10月末。秋晴れの陽射しに眩しく輝く銅屋根の御本殿を仰ぎ、平日だというのに国内外からの多くの参拝者で賑わっていた。

それにしても詳細な設計情報がない中、どうやって銅屋根を再現できたのだろう。「屋根を剥がして水漏れの状況、原因を確認し、二重葺きや、葺き方を変え、極力、木の下地や構造が傷まないように工夫していきました」

銅でできた鋳金物は丁寧に洗浄し、歪みなども直して漆箔、金メッキでお色直しを行った。柱や天井などの木部は、刷毛を使い手作業で丁寧にほこりを払っていく。気の遠くなるような作業だが、これで本来の美しさを取り戻していった。

屋根の主要部に使われた四ツ切銅板は約13万枚、唐草・みの甲などの役物を含めると銅板総使用量は約70トンにもなる。これだけの規模と工期では、職人の確保も大変だったのでは。「ベテラン職人と共に、初めて銅屋根の葺替えに挑む若き技術者も一緒に作業し、技を覚えていきました。銅屋根の一字葺きは、どう行おうか。ただきれいに並べただけでは、太陽の陽射しを受けた熱により銅板は伸縮し、浮きやシワ、傷、壊れなどが発生します。これを計算した上で施工する熟練の技を目的に、多くを学べたと思います」

明治神宮鎮座百年大祭のテーマは「はじめの百年。これからの千年。―まごころを継ぐ― 永遠の杜ををめぐして」である。美しく輝くこの銅屋根も、創建時より息づく匠の技とともに、百年、二百年先も大切に受け継がれていくに違いない。